

総合農業技術センター試験研究課題事前評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜の作期拡大技術の確立（H23～）

小課題名：平坦地におけるキャベツ、ニンジンの冬期および早春期どり栽培技術（H26～28）

担当者名：中村知聖、赤池一彦

評価項目	評価点	指摘事項
1 課題設定の必要性 （背景、社会的ニーズ）	5 / 5	冬期から早春期にかけて県産野菜の供給量が少ない状況にあり、この時期に野菜を安定生産する作期拡大技術を開発するという課題設定の必要性は十分認められる。
2 課題の新規性、独創性	4 / 5	キャベツとニンジンの新しい作型を確立する課題であり、実用的な観点での新規性があると認められる。
3 目的・内容の整合性、妥当性	4 / 5	これまで生産ができなかった冬期に常用野菜の安定生産技術を確立し、新たな品目を拡大して経営の安定化を図るという研究の目的・内容は妥当である。
4 研究手法の的確性、技術的可能性	4 / 5	これまでもコマツナ、チンゲンサイ、レタス等について作期拡大技術を開発しており、キャベツとニンジンについても同様の技術開発を行う研究手法は的確であり、技術的可能性はであると認められる。
5 成果の期待度	4 / 5	冬期に生産できる野菜の品目がさらに充実し、高収益につながるのと同時に、年間を通した安定的な供給が可能になると期待される。但し、市場出荷の場合は、輸送や暖地産地との競合が考えられる。
総合評価	4 / 5	技術開発のニーズが極めて高い課題であり、実施する意義は高いと考えられる。冬季から早春期にかけて不足する野菜品目を補うのは重要であり、農家の収入アップにつながる。他の野菜についても、新しい作型の開発を検討してほしい。

試験研究機関の処置

冬期から早春期にかけての県産キャベツ、ニンジンの高い需要に応えられるよう、生産の実用性・安定性を重視し、幅広い農家に普及できる栽培技術を確立したい。生産物は直売等の県内流通を中心に考えている。今後さらに品目の拡大を目指していきたい。

総合農業技術センター試験研究課題事前評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜の作期拡大技術の確立（H23～）

小課題名：高冷地における冬季のアスパラガス伏せ込み栽培技術の確立（H26～28）

担当者名：窪田 哲、萩原裕一

評価項目	評価点	指摘事項
1 課題設定の必要性 （背景、社会的ニーズ）	4 / 5	峡北地域のような高冷地では、冬季の野菜生産は少ない。経営の安定化を図るためには冬季に導入できる収益性の高い新たな品目が求められており、課題設定の必要性は認められる。
2 課題の新規性、独創性	4 / 5	アスパラガスの伏せ込み栽培は全国的に試みられており、それ自体の新規性は必ずしも高くないが、他地域とは異なる作型が検討されており、独創性はあると認められる。
3 目的・内容の整合性、妥当性	4 / 5	この技術の受益者としては、機械・施設等を有する農業生産法人が想定されており、目的・内容の整合性はとれている。但し、受益者の範囲を拡大するために、技術の簡易化を図ってはどうか。
4 研究手法の的確性、技術的可能性	4 / 5	根株の掘り上げ時期をずらしながら連続的な収穫と作業の分散を図る等の工夫がなされ、予備試験もなされているので、技術的可能性はあると考えられる。
5 成果の期待度	4 / 5	この作型では、株の養成期間が1年半と比較的長いいため株が大きく、高収量が期待できる。また、夏秋トマト等の露地栽培と組み合わせることにより、年間を通じた経営の安定化が期待できる。
総合評価	4 / 5	高単価のアスパラガス生産の実現により冬季の収入源の確保が期待できるが、伏せ込み栽培には機械・施設・作業量が多くかかると思われるので、普及のためには確実な経営評価を実施してほしい。また、労力の軽減対策の工夫が必要である。

試験研究機関の処置

機械・施設の償却、作業時間などから経営評価を行ない、普及場面で提示できるようにしたい。また、掘り上げ作業の大幅な省力は難しいが、伏せ込みなどの簡略化により労力の軽減を図っていきたい。

野菜生産の少ない冬季に安定した収益につながるよう、栽培技術の確立を目指す。

総合農業技術センター試験研究課題事前評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：環境保全型農業の確立（H19～）

小課題名：野菜の有機栽培に適した耕種的管理技術の確立（H26～30）

担当者名：窪田 哲、萩原裕一

評価項目	評価点	指摘事項
1 課題設定の必要性 （背景、社会的ニーズ）	4 / 5	新規就農者が増加傾向にあり、その多くが有機栽培、減農薬・減化学肥料栽培を目指しているとのことであり、課題設定の必要性は認められる。
2 課題の新規性、独創性	4 / 5	数多くの品種が種苗メーカーから販売されているが、有機栽培に適した品種の選定や栽培技術については必ずしも明らかにされておらず、実用的な観点での新規性はあると認められる。
3 目的・内容の整合性、妥当性	4 / 5	農家からは各野菜の様々な品種について、特性や栽培技術に関する情報の提供を求める要望が多くあり、本課題の目的・内容は妥当と認められる。
4 研究手法の的確性、技術的可能性	4 / 5	試験計画では多くの品目があげられているが、これらに品種、栽培法、施肥法等を組み合わせると膨大な試験区となるので、効果的に成果が得られるよう目標を絞って進めてほしい。
5 成果の期待度	4 / 5	これまでに、キュウリとトマトの有機栽培に適する品種が選定され、栽培技術が開発されており、他の品目でも同様の成果が得られることが期待される。直売所ではニーズも高いので期待度は大きい。
総合評価	4 / 5	品種選定については、有機栽培に適するだけでなく収穫物の品質の観点も含めて検討することが重要であろう。また、農家に情報を提供するためには、実際に圃場での試験を実施し、年間を通じて安定生産できる栽培方法の開発が望まれる。

試験研究機関の処置

農家により多くの情報を提供するため、年次計画により品目を検討するとともに、できるだけ調査項目を絞り、効率的に試験を行っていきたい。

収穫物の品質についても実用性評価の項目として情報を提供していきたい。

総合農業技術センター試験研究課題事前評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜・花きの栽培改良（S47～）

小課題名：富士北麓地域における夏秋どりスイートコーンの倒伏軽減技術の確立（H26～28）

担当者名：渡辺 淳、長坂克彦

評価項目	評価点	指摘事項
1 課題設定の必要性 （背景、社会的ニーズ）	5 / 5	当地域における野菜の主要品目であるスイートコーンについて、台風等による倒伏は生産量低下の重大な原因であり、倒伏軽減技術の確立は重要な課題である。課題設定の必要性は高い。
2 課題の新規性、独創性	4 / 5	倒伏被害を軽減するためには倒れにくい作物体を作ることが重要であり、短桿栽培技術、栽植方法、ケイ酸資材の投与等を試みるなど、新規性・独創性が認められる。
3 目的・内容の整合性、妥当性	4 / 5	試験の目的・試験内容の構成については整合性がとれており、妥当であると認められる。短桿栽培技術については、品種、育苗法、定植法等の技術を中心に開発してはどうか。
4 研究手法の的確性、技術的可能性	4 / 5	短桿栽培技術については予備試験で良い結果が得られており、技術的可能性は高いと思われる。ケイ酸資材の使用については土壌診断結果と併せて判断してほしい。ケイ酸加里も検討に含めてはどうか。
5 成果の期待度	5 / 5	毎年台風等による倒伏の被害が多く発生する中で、短桿で倒伏しにくい栽培技術が開発されれば、台風の時期にも安定的な生産の可能性が期待される。
総合評価	4 / 5	まずは、倒伏しにくい短く強い作物体を作ることが重要であるので、耐倒伏栽培技術と倒伏軽減技術に重点を置いて進めてはどうか。道の駅などの直売所での消費が拡大され、富士山野菜のブランドの確立につながると期待される。

試験研究機関の処置

耐倒伏栽培技術として育苗・定植方法などによる短桿化を、また、倒伏軽減技術としてケイ酸資材などによる施肥改善や栽植方法を重点的に検討する。ケイ酸資材の使用については土壌診断を実施して養分バランスを把握し、資材の種類を検討することとしたい。

気象災害による被害を軽減し、生産を拡大することによって「富士山やさい」のブランド力強化につなげていきたい。

総合農業技術センター試験研究課題事前評価表（委員会用）

総合農業技術センター課題評価委員会

試験・研究課題名

大課題名：野菜・花きの栽培改良（S47～）

小課題名：富士北麓地域における据え置き株を活用した切り花の新作型開発（H26～28）

担当者名：渡辺 淳

評価項目	評価点	指摘事項
1 課題設定の必要性 （背景、社会的ニーズ）	5 / 5	当地域では花き生産者数が大きく減少し、高齢化も進んでいるが、切り花に対するニーズは高まっており、課題設定の必要性は高いと認められる。
2 課題の新規性、独創性	4 / 5	据え置き株を利用した切り花生産技術自体は他県でもすでに研究され、普及に移されているところもあるが、当地域に適した新しい作型を開発するものであり、実用的な面での新規性が認められる。
3 目的・内容の整合性、妥当性	5 / 5	従来の切り花生産では毎年種苗を更新するためコスト高が問題となっている。本課題では、とくに苗代が高くニーズも高い品目を選定しており、目的・内容の整合性、妥当性は高いと思われる。
4 研究手法の的確性、技術的可能性	4 / 5	これらの切り花は物日（母の日、お盆、彼岸）を中心に需要があるため、これらに合わせて収穫できる作型を開発する必要がある。予備試験の結果では、技術的な可能性はあると思われる。
5 成果の期待度	5 / 5	高冷地でも露地栽培や無加温栽培が可能となり、多くの生産者に導入しやすい技術になる。また、据え置き株を再利用することで生産コストを低減でき、成果の普及が期待できる。
総合評価	5 / 5	本技術の開発によって、物日に合わせた切り花の低コスト生産が可能になり、多品目を組み合わせた花束等として直売所・道の駅での販売が有望である。新テッポウユリとスターチスについては、3年までの据え置き栽培も検討してはどうか。

試験研究機関の処置

出荷期の拡大や生産コストの削減に向けて技術を開発し、需要期の出荷による有利販売を実現したい。新テッポウユリとスターチスについては、予備試験で3年までの据え置き栽培の可能性が示唆されているので検討を行っていきたい。